

★回りに向かう

～『南無阿弥陀仏』について～



第7号の終わりで、「次号はナムアマダブツの御念仏について～」と告知していたにも関わらず、ちゃんと果たせておりませんでした。失礼致しました。

私は葬儀の最後には必ず『ナムアマダブツ』の御念仏を唱えております。それも本宗では十念仏と呼ばれているように10回を基本に唱えております。

一般に御念仏と言うと、浄土系の宗派のみがお唱えすると思われがちですが、本宗が総合仏教とも呼ばれる天台宗の流れを汲むことから、日頃葬儀や法事などのお弔いの場で特にお唱えする機会が多いです。

そもそも『南無』とは『ナマス』というサンスクリット語を漢語で音写したもので、南無という字そのものに意味は無く、ナマスの意味が『帰敬』や『帰依』を表します。ですから南無阿弥陀仏とは「阿弥陀仏という仏様に帰依します。」という意味になります。

阿弥陀仏＝阿弥陀如来については以前の寺報で説明致した通りですが、これだけの説明では少々無味乾燥としたもので終わってしまいます。そこで今回は、文字通りこの南無阿弥陀仏に生きた一人の妙好人（浄土信仰に於いての篤信者）、浅原才市の詩をご紹介しますながら、御念仏について述べていきたいと思ひます。

(恐れながら以下、才市と表記させていただきます。)

私が才市を知ったのは、学僧時代に仏教学を教えていただいた先生から「鈴木大拙の『日本の靈性』という名著があるからいつかは読んでみなさい。」と勧められたことがきっかけでした。それから同じく鈴木大拙の『妙好人』を読み、そこで紹介されている才市が残した幾つもの詩に私は益々引き込まれていきました。

御念仏について、浄土系の僧侶ではない私があればこれ書くことは本来謹まなければならないことですが、上で述べましたように、私には日々檀家様の前で御念仏を唱えている事実があるわけですから、やはり自分なりの姿勢というか感慨のようなものを以下にしっかり示しておきたいと思うわけです。

さて、右に紹介した才市の詩を読むと、なにか不思議な感覚に包まれますか？

その理由は、才市が清貧な生活の中で自然と到達していた『無分別智』が、この詩の中の『ひとつ』という言葉に籠められているからです。

私は現在、この寺報やホームページなどで、あれこれと長文を書き綴っておりますが、全体を通してわたしが語っていることは、実は大半が無分別智の言い換えです。また、本宗でも思い入れを以て唱えることも多い涅槃経の中の天魔偈にしても、要するに無分別智の境涯を説いているのです。

では、それはいったい何なのか？ それは、『ひとつ』というキーワードをより深めていくと見えてきます。

仏教では、無分別に対して、この世と呼ばれる我々の日常は分別の世界であると言われます。例えば、ものの浄不浄、高い安い、好き嫌い、あなたと私、音楽の中に邦楽があって邦楽の中に演歌があって・・・、さらには〇〇菩薩より□□明王が偉い等々・・・、とにかく全てに分別を付けたがるのがこの世の常です。

そんなこの世に生きる我々は、知らず知らずのうちに物の見方や考え方までもが分別の世界にどっぷりと浸かってしまっているのです。その結果何が起きるかと言うと執着であり、それは分別がある限りどこまでも影のように纏わりついてきます。

しかし、妙好人はその執着という影を完全に払い去った境地に到達していて、その影の無い境地とは、つまり光源である阿弥陀仏に包まれることなのです。

この詩の中に出てくる、『親子』とはそのままに読んでも素晴らしいのですが、元の意味は阿弥陀仏と才市を表しています。本来の光源であるところの阿弥陀仏に照らされて、一心に御念仏を唱え、自らの分別が招く一切の波風の上を、只管に阿弥陀仏の舟におすがりしてその感謝に生きる。そうして唱え続けている御念仏は、もはや自分が唱えているのだという感覚を超越して、そこにはただ御念仏だけがあり、その時、本来無限の可能性を備えている我々凡夫は仏法を体現し、同時に阿弥陀仏に包まれている。それこそが正に『機法一体』の理を顕しているのです。そして、それはただの思い上がりでは決して無いのです。

以上、念仏行の実践も無く、字面を並べただけではただの増上慢に過ぎませんが、私は仏教者の端くれとして、現時点でこのような憧れだけは抱きながら『なむあみだぶつ』をお唱えしております。

子の心、子の心わ親の心よ。親の心、親の心は子の心よ。
親子の心、二つなし、ひとつ心、機法一体、なむあみだぶつ。
なむあみだぶつを外なし。
なむあみだぶつを助けたり、なむあみだぶつに助けられたり、
なむあみだぶつ。
なむあみだぶつ。

鈴木大拙『妙好人』
p.170,171から引用